

に至った。法華経は西域、中国、朝鮮、日本などの各地の文化に大きな影響を及ぼした。同経をめぐり現在に至るまで様々な研究が試みられてきたが、整備されたインデックスはまだ存在していない。このため本研究に於てはいわば副産物としてではあるが、索引の刊行を企図した。現在のところ作業は概ね完了し、原稿の形になっている。

3に就ては作成したデータベースを基に文献情報に関する簡単な計量分析を行った。その結果、文長、語長、文の数などの文に関する情報に基づき、いくつかの貴重な情報が得られた。しかし、今回作成したデータベースでは文法情報が動詞の判別等、未だ低い段階にとどまったため、文法情報に基づく分析に着手するに至らなかったことが残念である。今後の課題として、可能であれば試みなければならない問題である。

本研究はおそらく世界初の梵文文献を対象とする研究である。そのため、まだまだ議論されねばならない課題は多いが、所期の研究目的は達成されたと言える。

3-共研-83

源氏物語の計量国語学的分析

統計数理研究所 村上 征勝

源氏物語は平安中期に紫式部の手によって成立したとされる。しかしその作者をめぐっては多くの疑義があり、本研究は3年の計画でこの疑義に関するアプローチを試み、また平安期の日本語の計量的な特色を把握すべく研究を開始した。

さて、3年計画の初年度にあたる本年は、主に

- 1) 底本の選定、参考図書の整備
- 2) 原文の入力
- 3) 入力した部分の校正
- 4) 分ち書き

などの作業を行った。

1)については資料の作成と共に、将来解析を行うにあたり適切なデータが得られるか否かなどの観点から批判を行った。

2), 3)については富士電機 XP-50S を用い、原文を読み込み、更に人力による校正を行い、データを整備した。

4)については原則として手作業で行わざるを得ないと考えていたが、部分的にはあるが、分ち書きの自動処理プログラムが実用に堪えるレベルに至ったので、これを使用することにより大幅なスピードアップが可能となり、当初の予想以上に進歩した。

以上の作業と並行して、文法情報の作成、処理プログラムの作成が開始された。本研究では日蓮遺文の計量的研究に於て培われたノウハウを基に、文法情報を作成した。

3-共会-1

粒子発生過程の統計現象

信州大学 教養部 美谷島 実

標記研究会を10月28, 29日、文部省統計数理研究所で開催した。当研究会の当初の目的は“高エネルギー素粒子、原子核反応における高多重度現象の統計を如何に取扱うかを議論するこ

と”にあった。特に高エネルギー原子核反応では多重度は1,000以上になっている。将来多重度は5,000以上になるので、そのための解析方法等の研究が必要である。講演数は24であった。当研究会の開催にあたって次の諸点に留意した。

- ① 統数研の研究課題に関係するトピックスを含む (Higuchi 法, AIC, MEM 法, 変形負二項分布),
- ② 他分野の研究の諸成果の学習 (フラクタル, ウェイブレット法),
- ③ 最新の研究成果の講演 (間欠性, エントロピー生成, ストレンジ粒子の生成, 将来計画),
- ④ 研究課題の紹介 (特に若い参加者のためのプログラム)。

研究会の成果:

- 1) 高多重度の擬ラピディティ分布 ($\eta = -\ln \tan \theta/2$: θ 極角) の取扱いについて, FFT, MEM 法による解析の講演があった (高木 (東北大) 及び鈴木 (松商短)), しかし、それらの解析の仕方及び解釈が確立したものとは言い難い印象を与えた。
- 2) 北川 (統数研), 高安 (神戸大), 山田 (京大) 等の講演は, 参加した物理の研究者には非常に有効であった。
- 3) 並木 (早稲田大) によって, 量子揺らぎを如何に取扱うかの問題が提起されて, 今後に宿題を残した。
- 4) 変形された負二項分布の講演が鈴木と森 (埼玉大) によってされた。
- 5) 29日に早野龍五 (東大・理) 及び永宮正治 (コロンビア大) が講演したので, 標記の研究会としては, 理論と実験のバランスのとれたものになった。

尚, 統数研の研究会の形態としては, もう少し講演数を少なくして, 講演時間に余裕をもたせた方が, 良かったかも知れないと, 反省している。

3-共会-9 文献情報のデータベースとその利用に関する研究会

統計数理研究所 村上 征勝

文学, 哲学その他の人文科学の分野に於いては, 未だ統計が十分に利用されているとは言い難い。そこで, 研究者の交流や, さまざまな分野の知見の交換が可能となるべく, 本研究会を開催した。本研究会も今回で4回目を迎え, 当初に比べ, かなりの発展が見られた。統計学にとって言わば未知の領域であった人文科学への応用が, 徐々に増加しつつあるという点で, 今後の研究の発展につながるものと考え。

なお, 今回の研究発表は以下の通りである。

1. 文献情報データベースと社会情報データベースの統合化の必要性
齊藤たつき (札幌学院大学)
2. 画像付きクイックシステムについて
伊藤 雅光 (国立国語研究所)
3. マイクロ OCP で見る映画 —— 文章解析ソフトでの洋画字幕の分析
中井 紀明 (桃山学院大学)
4. 歴史民族資料カードデータベースの作成経験
照井 武彦 (国立歴史民俗博物館)
5. 日本語の方言音声データベース
板橋 秀一 (筑波大学)